

文鳥・夢十夜

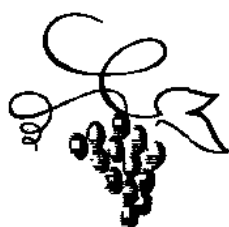
夏目漱石

新潮文庫

ぶん ちょう ゆめ じゅう や
文鳥・夢十夜

新潮文庫

な - 1 - 18



昭和五十一年七月三十日 発行
平成九年六月三十日 四十七刷

著 者 夏 目 漱 石

発行者 佐藤 隆 信

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

編集部(〇三)三二六六—五四四〇

電話 読者係(〇三)三二六六—五一—

振替 〇〇—一四〇—五—八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

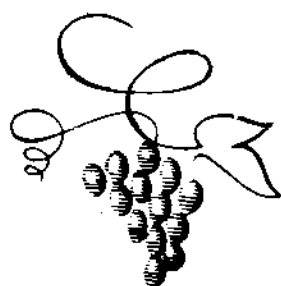
Printed in Japan

ISBN4-10-101018-8 C0195

新潮文庫

文鳥・夢十夜

夏目漱石著



新潮社版

234I

目次

文	鳥		セ
夢	十夜		二五
永日小品			五三
思い出す事など			二九
ケーベル先生			二三
変な音			二九
手紙			三七

注解・解説 三好行雄

文鳥・夢十夜

文

鳥

十月早稲田に移る。伽藍の様な書齋に只一人、片附けた顔を頬杖で支えていると、三重吉が来て、鳥を御飼いなさいと云う。飼ってもいいと答えた。然し念の為だから、何を飼うのかねと聞いたら、文鳥ですと云う返事であった。

文鳥は三重吉の小説に出て来る位だから奇麗な鳥に違なかうと思って、じゃ買ってくれたまえと頼んだ。ところが三重吉は是非御飼いなさいと、同じ様な事を繰り返している。うむ買うよ買うよとやはり頬杖を突いたままで、むにやむにや云ってるうちに三重吉は黙ってしまった。大方頬杖に愛想を尽かしたんだろうと、この時始めて気が附いた。

すると三分ばかりして、今度は籠を御買いなさいと云いだした。これも宜しいと答えると、是非御買いなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釈を始めた。その講釈は大分込み入ったものであったが、気の毒な事に、みんな忘れてしまった。只好いのは二十円位すると云う段になって、急にそんな高価のでなくっても善かろうと云って置いた。三重吉はにやにやしている。

それから全体何所で買うのかと聞いてみると、なに何所の鳥屋にでもありますと、実に平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なに何所にかあるでしょう、とまるで雲を攫む様な寛大な事を云う。でも君あてがなくなっちゃ不可なかうと、あたかも不可な様な顔をしてみせたら、三重吉は頬べたへ手を宛てて、何でも駒込に籠の名人があるそうですが年寄だそうですから、もう死んだかも知れませんか、非常に心細くなってしまった。

何しろ言いだしたものに責任を負わせるのは当然の事だから、早速万事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云う。金は慥に出した。三重吉はどこで買ったか、七子の三つ折の紙入を懐中していて、人の金でも自分の金でも悉皆この紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五円札を慥にこの紙入の底へ押し込んだのを目撃した。

斯様にして金は慥に三重吉の手に落ちた。然し鳥と籠とは容易にやって来ない。

そのうち秋が小春になった。三重吉は度々来る。よく女の話などをして帰って行く。文鳥と籠の講釈は全く出ない。硝子戸を透して五尺の縁側には日が好く当る。どうせ文鳥を飼うなら、こんな暖かい季節に、この縁側へ鳥籠を据えてやったら、文鳥も定めし鳴き善かろうと思う位であった。

三重吉の小説によると、文鳥は千代々々と鳴くそうである。その鳴き声が大分気に入ったと見えて、三重吉は千代々々を何度となく使っている。或は千代と云う女に惚れていた事があるのかも知れない。然し当人は一向そんな事を云わない。自分も聞いてみない。只縁側に日が善く当る。そうして文鳥が鳴かない。

そのうち霜が降り出した。自分は毎日伽藍の様な書齋に、寒い顔を片付けてみたり、取乱してみたり、頬杖を突いたり已めたりして暮していた。戸は二重に締め切った。火鉢に炭ばかり継いでいる。文鳥は遂に忘れた。

ところへ三重吉が門口から威勢よく這入って来た。時は宵の口であった。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳して、浮かぬ顔をわざとほてらしていたのが、急に陽気になった。三重吉は豊隆を従

えている。豊隆はいい迷惑である。二人が籠を一つずつ持っている。その上に三重吉が大きな箱を兄き分あにぶんに抱かかえている。五円札が文鳥と籠と箱になったのはこの初冬はつふゆの晩であった。

三重吉は大得意である。まあ御覧なさいと云う。豊隆その洋燈ランペンをもっと此方こつちへ出せなどと云う。その癖寒いので鼻の頭が少し紫色になっている。

成程立派な籠が出来た。台が漆で塗ってある。竹は細く削った上に、色が染つけてある。それで三円だと云う。安いなあ豊隆と云っている。豊隆はうん安いと云っている。自分は安いか高いか判然と判らないが、まあ安いなあと云っている。好いになると二十円もするそうですと云う。二十円はこれで二返目ニミである。二十円に比べて安いのは無論である。

この漆はね、先生、日向ひなたへ出して曝さらして置くうちに黒味が取れて段々朱の色が出て来ますから、——そうしてこの竹は一返善く煮たんだから大丈夫ですよなどと、しきりに説明をしてくれる。何が大丈夫なのかねと聞き返すと、まあ鳥を御覧なさい、奇麗でしょうと云っている。

成程奇麗だ。次の間へ籠を据えて四尺ばかり此方こつちから見ると少しも動かない。薄暗い中に真白に見える。籠の中にうづくまっていなければ鳥とは思えない程白い。何だか寒そうだ。

寒いだろうねと聞いてみると、その為ために箱を作ったんだと云う。夜になればこの箱に入れてやるんだと云う。籠が二つあるのはどうするんだと聞くと、この粗末な方へ入れて時々行水を使つかわせるのだと云う。これは少し手数が掛るなと思っていると、それから糞ふんをして籠を汚しますから、時々掃除をして御遣おやりなさいとつけ加えた。三重吉は文鳥の為には中々強硬である。

それをはいいい引受けると、今度は三重吉が袂たもとから粟あわを一袋出した。これを毎朝食わせなくつ

ちや不可いけません。もし餌えをかえてやらなければ、餌壺えつぼを出して殻かだけ吹ふて御遣おやんなさい。そうしないと文鳥が実のある粟を一々拾い出さなくっちゃなりませんから。水も毎朝かえて御遣おやんなさい。先生は寝坊だから丁度好いでしょうと大変文鳥に親切を極めている。そこで自分もよろしいと万事受合うけあった。ところへ豊隆が袂から餌壺と水入を出して行儀よく自分の前に並べた。こう一切万事を調べて置いて、実行を逼せまられると、義理にも文鳥の世話をしなければなくなる。内心では余程覺束おぼつかなかったが、まずやってみようとまでは決心した。もし出来なければ家のものが、どうかするだろうと思った。

やがて三重吉は鳥籠を叮嚀ていねいに箱の中へ入れて、縁側へ持ち出して、此所ここへ置きますからと云って帰った。自分は伽藍の様な書齋の真中まなかに床を展のべて冷かに寝た。夢に文鳥を背負しよい込んだ心持は、少し寒かったが眠ねってみれば不断の夜の如く穏かである。

翌朝よくあさ眼が覚めると硝子戸ガラスに日が射している。忽たちまち文鳥に餌をやらなければならぬと思った。けれども起きるのが退儀であった。今に遣やろう、今に遣ろうと考えているうちに、とうとう八時過になった。仕方がないから顔を洗う序ついでを以て、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋ふたを取って鳥籠を明海あかみへ出した。文鳥は眼をぱちつかせている。もっと早く起きたかっただろうと思ったら気の毒になった。

文鳥の眼は真黒である。瞼まぶたの周圍まわりに細い淡紅色の絹糸を縫い附けた様な筋が入っている。眼をぱちつかせる度に絹糸が急に寄って一本になる。と思うと又丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首を一寸傾かたぶけながらこの黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。そうしてちちと鳴い

た。

自分は静かに鳥籠を箱の上に据えた。文鳥はぱつと留り木を離れた。そうして又留り木に乗った。留り木は二本ある。黒味がかつた青軸(こ)を程よき距離に橋と渡して横に並べた。その一本を軽く踏まえた足を見ると如何にも華奢(ぎやしゃ)に出来ている。細長い薄紅(うすくれなひ)の端に真珠を削った様な爪が着いて、手頃な留り木を甘く抱え込んでいる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換えていた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首を不図(ふと)持ち直して、心持前へ伸したかと思つたら、白い羽根が又ちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の真中あたりに具合よく落ちた。ちちと鳴く。そうして遠くから自分の顔を覗き込んだ。

自分は顔を洗いに風呂場へ行った。帰りに台所へ廻って、戸棚を明けて、昨夕(ゆう)三重吉の買つて来てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、又書斎の縁側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕(ゆう)叮嚀に餌を遣る時の心得を説明して行った。その説によると、無暗に籠の戸を明けると文鳥が逃げ出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手をその下へ宛てがって、外から出口を塞ぐ様にしなくては危険だ。餌壺を出す時も同じ心得で遣らなければならない。とその手つきまでしてみせたが、こう両方の手を使って、餌壺をどうして籠の中へ入れる事が出来るのか、つい聞いて置かなかった。

自分は已むを得ず餌壺を持ったまま手の甲で籠の戸をそろりと上へ押し上げた。同時に左の手で開いた口をすぐ塞いだ。鳥は一寸振り返った。そうして、ちちと鳴いた。自分は出口を塞いだ

左の手の処置に窮した。人の隙を窺って逃げる様な鳥とも見えないので、何となく気の毒になった。三重吉は悪い事を教えた。

大きな手をそろそろ籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏を始めた。細く削った竹の目から暖いむく毛が、白く飛ぶ程に翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭になつた。栗の壺と水の壺を留り木の間に漸く置くや否や、手を引き込みました。籠の戸ははたりと自然に落ちた。文鳥は留り木の上に戻った。白い首を半ば横に向けて、籠の外にいる自分を見上げた。それから曲げた首を真直にして足の下にある栗と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた。

その頃は日課として小説を書いている時分であつた。飯と飯の間は大抵机に向つて筆を握つていた。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事が出来た。伽藍の様な書齋へは誰も這入つて来ない習慣であつた。筆の音に淋しさと云う意味を感じた朝も昼も晩もあつた。然し時々はこの筆の音がびたりと已む、又已めねばならぬ、折も大分あつた。その時は指の股に筆を挟んだまま手の平へ顎を載せて硝子越に吹き荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが済むと載せた顎を一応撮んでみる。それでも筆と紙が一所にならない時は、撮んだ顎を二本の指で伸してみる。すると縁側で文鳥が忽ち千代々と二声鳴いた。

筆を擱いて、そつと出てみると、文鳥は自分の方を向いたまま、留り木の上から、のめりそうに白い胸を突き出して、高く千代と云つた。三重吉が聞いたらさぞ喜ぶだろうと思ふ程な美しい声で千代と云つた。三重吉は今に馴れると千代と鳴きますよ、きっと鳴きますよ、と受合つて帰つて行つた。

自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度豎横に向け直した。やがて一団の白い体がぼいと留り木の上を抜け出した。と思うと奇麗な足の爪が半分程餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引っ繰り返りそうな餌壺は釣鐘の様に静かである。さすがに文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精の様な気がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の真中に落した。そうして二三度左右に振った。奇麗に平して入れてあった粟がはらはらと籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微かな音がする。又嘴を粟の真中に落す。又微かな音がする。その音が面白い。静かに聴いていると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。董程な小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の基石でもつづけ様に敲いている様な気がする。

嘴の色を見ると紫を薄く混ぜた紅の様である。その紅が次第に流れて、粟をつつく口尖の辺は白い。象牙を半透明にした白さである。この嘴が粟の中へ這入る時は非常に早い。左右に振り蒔く粟の珠も非常に軽そうだ。文鳥は身を逆さまにしないばかりに尖った嘴を黄色い粒の中に刺し込んで、膨くらんだ首を惜気もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の数は幾粒だか分らない。それでも餌壺だけは寂然として静かである。重いものである。餌壺の直径は一寸五分程だと思ふ。自分はそつと書斎へ帰って淋しくペンを紙の上に走らしていた。縁側では文鳥がちちと鳴く。折々は千代々々とも鳴く。外では木枯が吹いていた。

夕方には文鳥が水を飲む所を見た。細い足を壺の縁へ懸けて、小さい嘴に受けた一雫を大事そうに、仰向いて呑み下している。この分では一杯の水が十日位続くだろうと思つて又書斎へ帰った。

晩には箱へしまつて遣った。寝る時硝子戸から外を覗いたら、月が出て、霜が降っていた。文鳥は箱の中でことりともしなかった。

明る日もまた気の毒な事に遅く起きて、箱から籠を出してやったのは、やっぱり八時過ぎであった。箱の中ではとうから目が覚めていたんだろう。それでも文鳥は一向不平らしい顔もなかった。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたいて、心持首をすくめて、自分の顔を見た。

昔し美しい女を知っていた。この女が机に凭れて何か考えている所を、後から、そつと行つて、紫の帯上げの房になった先を、長く垂らして、頸筋の細いあたりを、上から撫で廻したら、女はものう氣に後を向いた。その時女の眉は心持八の字に寄っていた。それで眼尻と口元には笑が萌していた。同時に恰好の好い頸を肩まですくめていた。文鳥が自分を見た時、自分は不図この女の事を思い出した。この女は今嫁に行った。自分が紫の帯上でいたずらをしたのは縁談の極った二三日後である。

餌壺にはまだ粟が八分通り這入っている。然し殻も大分混っていた。水入には粟の殻が一面に浮いて、苛く濁っていた。易えて遣らなければならない。又大きな手を籠の中へ入れた。非常に要心して入れたにも拘らず、文鳥は白い翼を乱して騒いだ。小い羽根が一本抜けても、自分は文鳥に済まないと思った。殻は奇麗に吹いた。吹かれた殻は木枯が何処かへ持って行った。水も易えてやった。水道の水だから大変冷たい。

その日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。その間には折々千代々と云う声も聞えた。文